

④所見**木村家住宅について****1. 由緒・沿革**

木村家住宅の位置 木村家住宅は、八尾市東本町 2 丁目に所在し、近鉄八尾駅より南に 200m 程の位置にある。東西に走る道路（東は立石街道、西は八尾地藏・常光寺に通ずる）の南側に敷地を構え、その敷地は約 600 坪を占める。また、屋敷地近くには国登録有形文化財の「桃林堂板倉家住宅」が、大坂の平野から久宝寺内町を経て植松に通じる八尾街道が南に曲がる角地にある。周辺は市街化が進むものの、江戸時代は八尾寺内町に隣接する東郷村にあたる地域で、江戸時代の歴史的景観を残している地域である。

主要な建物は、敷地中央に「主屋」を構え、西隣に「土蔵」（店蔵）を続け、その西側に別の屋敷があったが、現在は木村小児科病院（平成 3 年）が建てられている。主屋は東側に玄関土間が設けられ、その奥に中土間、さらに台所・居間が続き、その奥には新設の住宅（昭和 44 年（1969）建築）が建てられている。主屋の西側は座敷部分（主要 6 室）とされ、その北西奥に「茶室」を設け、その西隣に「本蔵」が南北に長く建てられる。茶室の南東は庭を広がり、座敷部分の東側からも新設の住宅へ渡り廊下を延ばし、茶室南東の庭を取り囲む構成としている。

木村家の概要 室町時代末に応仁の乱（1467～77）が起これと、戦乱は京都から畿内に広がり、河内でも戦いが繰り広げられた。この頃木村家は、河内半国を支配し若江城を拠点とした三好家に仕える土豪の武士であった。中世末から近世初頭にかけては、横小路代官を 3 代に亘って勤め、同家には享禄 5 年（1532）の方便法身尊像が残されている。木村家の先祖は東郷に土着し、慶長年間（1596～1615）頃より木綿商を始めて初代庄兵衛と称した。

その後、木村家は、宝永元年（1701）の大和川付替えにより中河内一帯が大綿作地になると、木綿仲買組の八尾組に名を連ね、河内木綿商として繁栄を築くことになる。しかし、明治時代に入ると海外から安価な綿糸の流入が始まり、明治 27 年（1894）に綿花輸入税が撤廃されたため河内木綿は急速に衰退し、木綿問屋も経営の危機にみまわれ、当家も明治 38 年（1905）十五代庄兵衛の死去を契機に家業を閉じることになった。十六・十七代を経て、十八代厚行氏、十九代三郎氏（現当主）が開業医として当家を引き継いでいる（注 1）。

当家には江戸期から明治期までの絵図（屋敷図）が 3 点残されている。最も古い絵図①は、「木村庄兵衛 当廿二歳 十九歳 内室」と記される家相図であり、天保 13 年（1842）の屋敷図とさ

れ、江戸後期の間取りを忠実に描き、6ヶ所に吉凶を占った貼紙を付け、一部に朱書きの図を加えている（注2）。次に古い絵図②は表書きが無いが、その内容は絵図①とほぼ一致し、僅かな違いは奥座敷の東側に廊下を通して点である。その廊下は次の絵図③に一致しており、絵図②は絵図①が制作された後に間もなく描かれたものと考えられる（注3）。絵図③は、「實測平面圖 中河内郡八尾町大字東郷四百拾九番地 本宅地坪数六百参拾壹坪云々」と記された屋敷図であり、これまでの2点と異なるのは、明治期の所在地名であること、本蔵と奥座敷との間に3畳の茶室が描かれていることである（注4）。当家に残された3点の絵図（屋敷図）には、主屋を中心に土蔵、本蔵、茶室、付属屋などが詳細に描かれており、幸いに現代まで「主屋」、「土蔵」、「本蔵」、「茶室」がよく残されている。

（注1）木村家の世代は『古記録からみた木村家累代の餘慶』（平成16年刊行・私家版）に、次のように記されている。

初代：東郷釈法道・・・八尾地域の真宗教団の有力層での本願寺十世証如（1516-1554）より方便法身尊像を下され、若江城の三好家に仕える。

二代：兵左衛門尉・・・三好下野守に仕え、永禄五年（1562）泉州久米田の合戦で討死。

三代：孫重郎・・・河州大芝の合戦で討死。父兵左衛門尉の在位中。

四代：勘左衛門尉・・・三好宗三政長後の因幡守に仕え、横小路代官を勤める。

五代：吉左衛門・・・横小路代官を勤める。

六代：勘左衛門・・・横小路代官を勤める。

七代：庄兵衛・・・木綿商初代、慶長19年（1614）大坂冬の陣で大阪方の地焼に遭い、元和元年（1615）大坂夏の陣の八尾合戦による被害に遭う。

八代：庄兵衛・・・近江とかかわり広く商う。西座敷（現存せず）は近江商家の別宅を移したという。

九代：庄兵衛（法道）・・・京都、彦根、長浜、津等で商い、正徳2年（1712）65歳で没す。

十代：徳兵衛（法祐）・・・天和3年（1683）出生。正徳2年（1712）没す。

十一代：庄兵衛（浄悦）・・・元禄5年（1692）出生。家業に励み財を築き、信貴、高安の山を開墾、新田を営し、中河内の長と称され、安永10年（1781）没す。

十二代：庄兵衛（浄正）・・・元文元年（1736）出生。家訓を守り信仰厚く業に励み、木綿問屋の基礎を確立する。

天明4年（1784）年に49歳で没す。

十三代：庄兵衛（浄琳）・・・明和8年（1771）出生。深く神儒仏道に帰依し、佛典、教本、書簡、木綿・庄屋記

録等を多く残す。天保 8 年（1837）没す（月燈居士）。

十四代：庄兵衛（浄順）・・・文政 4 年（1821）出生。先代に子が無く甥の雄親が家督を継ぐ。明治 24 年（1891）没す。

十五代：庄兵衛（浄道）・・・嘉永 7 年（1854）出生。儒者藤沢南岳に学び、雅号は東塙（とうお）、茶道、南画を嗜む。木綿業を廃業し、明治 38 年（1905）に没す。

十六代：志満（尼妙信）・・・明治 21 年（1888）出生。男子二人早世により相続。明治 42 年（1909）に 22 歳で没す。

十七代：勤（浄勤）・・・先代の妹庫の婿養子。昭和 38 年（1963）76 歳で没す。

十八代：厚行（真行）・・・大正 3 年（1914）出生。軍医大尉として中国大同陸軍病院に勤務後に開業医、八尾市医師会長。平成 3 年（1991）78 歳で没す。

十九代：三郎・・・昭和 29 年（1954）出生。大阪大学小児科教官、開業医（現職）。

（注 2）貼紙に「来卯年」とあり「来年の卯年」と解釈すると「寅年」作図となり、「寅年」に「廿二歳」の「庄兵衛」に係る絵図とすれば、「庄兵衛」生まれ年の干支は「巳年」となり、該当する当主は十四代目「浄順 庄兵衛」となり、この絵図は天保 13 年寅年（1842）の図と推定できる。（木村家文書 22-5-2）

（注 3）表書き無し。（河内国若江郡東郷村 木村家文書. 22-7-12）

（注 4）「實測平面圖 中河内郡八尾町大字東郷四百拾九番地 本宅地坪数六百参拾壹坪云々」の地名表記は、明治 36 年（1903）から明治 38 年（1905）に用いられた。

2. 主屋について

1) 建築年代・改修年代

建築年代：江戸後期（18世紀後半）

改修年代：江戸末期（嘉永5年（1852））、明治後期、昭和27年、昭和36年、昭和58年、平成4年

2) 建築物の概要

木造平屋建、棧瓦葺、建築面積 206.78 m²、塀付延長 16m

主屋は、桁行7間、梁間5間、切妻造り、棧瓦葺、北面建ちの建物である。正面東側に主屋から続く、切妻造の棧瓦葺の塀が付く。

間取りは、東側3間を土間部分、西側4間を座敷部分として2つに分け、座敷部分では北側道路から南北に表列幅2間、中列幅1間半、裏列幅1間半の3列の室通りを設け、東西に2間毎の柱通りを通すことで6つの室区分とする。

土間部分は、当初は北入口から「表土間」、「中土間」、「裏土間」を一行に並べていたが、現在は「表土間」と「中土間」を残して、「裏土間」は改造されている。「表土間」は、正面に玄関口、東面に戸口、内部では西側室境に幅半間の踏台を設け、上部につし天井を張り、南面に壁を立ち上げ、奥の「中土間」への通路を設けている。「中土間」は、室境に幅半間の踏台を設け、東側に6畳程の部屋を付け、南面は壁を立ち上げている。現在、「中土間」から南奥は、西に4畳半の板間、東に10畳程の台所（昭和58年（1983）改修）、廊下を挟んで10畳の和室、8畳の居間、その奥に洗面・浴室を設けている。さらに、その南は坪庭を挟んで、新設の住宅に通じる。

座敷部分は、表列では東から「表クチノマ」（8畳・昭和36年（1961）に板間に改修）、「表座敷」（6畳・昭和27年（1947）診察室に改修し、平成4年（1992）に現状に再改修）と、板間になった「奥座敷」（6畳）の3室が続く。その西隣に「土蔵」（店蔵）が建っている。中列では東から「中クチノマ」（6畳）、「中座敷」（6畳）が続き、裏列では東から「ダイドコ」（6畳）、裏座敷（6畳）が続き、この奥に「仏間」（3畳）、その南奥に「茶室」（3畳・4畳半）が設けられ、茶室の西隣に「本蔵」が建てられている。

つし二階は、「表土間」、「表クチノマ」、「中クチノマ」の3室上部に造られ、「表クチノマ」、「中クチノマ」境の東端に大黒柱が立ち、「表クチノマ」は現在応接間に改装され、西側に階段が造られている。なお、3列目の「ダイドコ」、「裏座敷」の南側には庭に面する廊下が通り、その

後端が茶室への廊下に通じている。

主屋は、土間の南奥に改修された部分があるが、全体として良く保存されている。建立年代は、祈祷札に「多賀大社 奉修長日護摩供家内安全壽福増進子孫長久祈攸 嘉永五年壬子年 八月十五日 成就院 修行之」とあり、嘉永 5 年（1852）に修造されたことが分かる。その内容は、絵図①（天保 13 年・1842）と絵図③（明治 38 年頃・1905）に描かれる主屋の間取りに大きな変化が無く、大幅な修理ではなかったとみられ、主屋の建立年代は嘉永 5 年以前と考えられる。

当初の建立年代は明らかでないが、当家の世代を遡ると十一代庄兵衛（浄悦）が木綿業に加えて新田開発などを行い、大邸宅を興したとある（注 5）が、安永 10 年（1781）に没している。十二代庄兵衛（浄正）は家訓を守り信仰厚く業に励み、木綿問屋の基礎を確立したとされ、天明 4 年（1784）年に没していることから、いずれかの世代に建立された可能性があり、18 世紀後半の建物と推定される。

（注 5）「十一代庄兵衛コト浄悦居士 浄悦姓ハ木村氏世ニ庄兵衛ト称ス、・・・三兵衛忠心ニテ恒ニ悦ノ家ニ出入セン而シテ悦ノ盡ク幹タルナリ、悦、三兵衛ト共ニカヲ戮シ、烝々業ヲ勤ム、遂ニ大ニ庭（邸）宅ヲ興セリ、而シテ累貨巨萬ナリ、・・・」（前掲『古記録からみた木村家累代の餘慶』P18 より）

3) 評価

（1）国土の歴史的景観に寄与しているもの

木村家住宅は、江戸後期から明治後期にかけての河内木綿商の屋敷として建築されたもので、「主屋」、「土蔵」、「本蔵」、「茶室」などの主要建物が残されており、これらの建物は修復の手が入っているものの、江戸時代の木綿商人の建築形態をよく残し、しかも歴代当主の事業、活動等の古記録も数多く残されているため、河内木綿商人の屋敷を理解する上で貴重な建築群である。

「主屋」と「土蔵」は道路に面し、本地域の江戸時代の歴史的景観を継承し、「国土の歴史的景観に寄与する建物である」と評価される。

3. 土蔵について

1) 建築年代・改修年代

建築年代：江戸末期（文政 8 年（1825））

改修年代：昭和 52 年（白壁補修）、平成 14 年（床、壁、庇補修）

2) 建築物の概要

土蔵造平屋建、本瓦葺、建築面積 28.04 m²

土蔵は、桁行 3 間、梁間 2 間、切妻造り、本瓦葺、平屋建て、主屋の西側に並立し、南面建ちの建物である。

間取りは、内部では板張りの 1 室とし、東側 1 間に間仕切りを設け（後補）、上部の棟木通りに牛梁を通し、これに登梁を掛けている。外観は、白漆喰で固め、南正面では主屋から延びる廊下を通し、漆喰壁の中央部に片引き戸を吊って入口とし、西妻では漆喰壁を見せ、道路側の北面では漆喰壁に庇付小窓 1 を開け、内法高下を杉板の縦板張りとしている。

棟木に付けられた祈祷札に「平岡社奉修千座稜家雲長久息災延命攸 河内国一宮 文政八乙酉 歳 八月吉日 神主鳥居主膳中臣平岡連忠坊」とあり、文政 8 年（1825）の建立とみられる。

3) 評価

（1）国土の歴史的景観に寄与しているもの

木村家住宅は、江戸後期から明治後期にかけての河内木綿商の屋敷として建築されたもので、江戸時代の木綿商人の建築形態をよく残し、河内木綿商人の屋敷を理解する上で貴重な建築群である。「土蔵」は「主屋」とともに道路に面し、その外観は主屋正面の景観と良く調和し、本地域の江戸時代の歴史的景観を継承している。

4. 本蔵について

1) 建築年代・改修年代

建築年代：江戸末期／改修年代：明治後期

2) 建築物の概要

土蔵造二階建、本瓦葺、建築面積 38.81 m²

本蔵は、桁行5間、梁間2間、切妻造り、本瓦葺、2階建て、東面する建物である。

間取りは、1階は板張りの1室とし、柱筋ごとに梁行の角梁を入れて床板を支え、入口の北脇に階段を設けている。2階も板張りの1室とし、上部の棟筋に太い牛梁を通し、これに登梁を掛けるが、牛梁と登梁などに古材が用いられている。外観は、白漆喰で固めて内法高下を杉皮で覆い、周囲に6ヶ所の庇付の小窓を開け、東面中央に片引の大戸を入れている。なお、茶室との間は、本蔵入口の上部に屋根を掛けて渡り板を設け、茶室の4畳半の西面北寄りの柱間に引戸を入れて通じている。

二階の小屋組に古材（前進建物）の登梁と野棟木（牛梁）が用いられ、柱、母屋桁、垂木等に新しい木材が用いられており、修築されたことが分かる。天保13年（1842）の絵図①では本蔵を「新蔵」と記し、主屋西隣の土蔵を「もめん蔵」と記していることから、文政8年（1825）の土蔵より後に建立されたとみられる。また、本蔵には丸釘等が使われているため、明治後期に修理が行われたとみられるが、絵図③に現本蔵が描かれているので、明治38年（1905）以前の建築と考えられる。

3) 評価

(1) 国土の歴史的景観に寄与しているもの

木村家住宅は、江戸後期から明治後期にかけての河内木綿商の屋敷として建築されたもので、河内木綿商人の屋敷を理解する上で貴重な建築群である。

本蔵は、江戸末期の当家の屋敷構えを構成する建物の一つであり、本地域の江戸時代の歴史的景観を継承している。

5. 茶室について

1) 建築年代・改修年代

建築年代：明治中期／改修年代：明治後期

2) 建築物の概要

木造平屋建、棧瓦葺、建築面積 18.70 m²

茶室は、主屋南東にあり、裏座敷と本蔵との間に建つ。

桁行1間半、梁間2間半、切妻造棧瓦葺で、北寄りに銅板葺の屋根を差し掛ける。主屋から通ずる廊下の入口には「月燈菴」の額を掲げている。「月燈」とは十三代庄兵衛（月燈居士）のことで、十三代が使用した茶器も残されており、十三代を偲んで建築されたものとみられる。

内部は三畳と四畳半の茶室が南北にならび、南寄りの四畳半には南側に濡れ縁が付属する。三畳の茶室は東寄りの一畳を点前座とし、西寄りの二畳分を客座とする。点前座には丸一畳の畳が敷かれているが、台目の位置（風炉先から1尺5寸ほど下がった位置）に入炉向切の形式で炉が切られていることから、点前座は台目畳向切というわびた構えに通底する。この場合、風炉先に向板を入れるのが通例であるが、ここに向板を入れた痕跡の有無については未調査である。

点前座正面に風炉先窓（下地窓）を開け、点前座の天井はノネ板網代張りの落天井とし、炉の上に蛭釘を打つ。勝手付にあげられた茶道口は頭部にわずかに曲がりつけた花頭口とする。

客座二畳部分の天井は全面化粧屋根裏とし、杉磨小丸太の檼を三通り配し、ノネ板を羽重にして張る。北西の隅にクグリ（躰口）をあげ、その上に連子窓をあける。西の壁面は南寄りの高い位置に無双釘を打って壁床とし、北寄りには躰口上の連子窓と同じ高さに窓をあける。

客座南の壁面は間口一間いっばいに襖を建てて南の四畳半茶室とつながっている。

四畳半茶室は三畳茶室と襖をへだてて南に隣接する。南側に引き違いの明かり障子を建て、その外に濡れ縁を設けて茶室へ上り口としている。西の壁面の南寄りに半間の吊り床を構え、対する東の壁面には高い位置に円窓をあげ、北寄りに茶道口をあける。天井は前面に竿縁天井。炉は切られていない。

四畳半の茶室は吊り床や円窓など煎茶席に好まれる意匠が見られ、南に大きな開口部を設けて庭に開放されているのも煎茶席に相応しい構えである。当家に煎茶道具が所蔵されていることから、四畳半の茶室は三畳の茶室と併用した多くの客を招いた茶会、あるいは大人数での稽古を可能にする

とともに、煎茶にもかなう開放的な茶室として建設された可能性がうかがえる。

茶室の建立年代を明らかにする史料はないが、当家所蔵の天保 13 年（1842）に描かれた絵図①には主屋と蔵（この絵図では「新蔵」）との間に渡り廊下があるのみで茶室は描かれていない。そして、明治 38 年（1905）以前に描かれたとみられる絵図③では主屋と蔵（この図では「本蔵」）とをつなぐ渡り廊下の側面に三畳の茶室が描かれている。露地の飛び石につながる出入口（現状の踊り口）の位置も一致している。これらのことから、三畳の茶室は、遅くとも明治 38 年代以前に建設されたと推定できる。

三畳の茶室は茶の湯（抹茶）のためのわびた草庵風茶室であり、目視による材料の経年の状況などから、明治中期の建築として相応であり、むしろ明治初期あるいは幕末までさかのぼるとしても違和感はない。それに対して柱などの材料の経年状況から四畳半の茶室が三畳の茶室より遅れて建設されたことは明らかであり、三畳の茶室の南側の柱の南面下部に風食が顕著に認められる。明絵図③にあるように、主屋と蔵とをつなぐ外廊下の北側面に面して三畳の茶室が外気に触れて建っていた期間があったことを物語っている。三畳の茶室が建設されてからしばらく後に、渡り廊下を解体して四畳半が増築されたのであろう。

この時期の当主である十五代庄兵衛（浄道）は嘉永 7 年（1854）に出生し、儒者藤沢南岳に学び、雅号は東塙（とうお）、茶道、南画を嗜み、明治 38 年（1905）に没している。このことから、茶室は、十五代目の当主が家督を継いだ明治 24 年（1891）前後の建築の可能性もある。さらに、四畳半の増築も、十六代目以降に茶室を増築した来歴がないことから、十五代目当主の時代の明治 38 年までに増築されたと考えられる。

また、昭和 29 年（1954）に歌人の柳原白蓮が当家で短歌の会を行ったおりに茶室の前で撮影された写真が残されている。

3) 評価

（1）国土の歴史的景観に寄与しているもの

木村家住宅は、江戸後期から明治後期にかけての河内木綿商の屋敷として建築されたもので、河内木綿商人の屋敷を理解する上で貴重な建築群である。

二つの茶室が隣接して建つ木村家の茶室は、茶の湯のための本格的なわびた草庵風茶室として貴重で、八尾における明治期の茶の湯と煎茶による茶文化の様相を知る上で興味深い遺構である。木村家が営んだ木綿商だけでなく、当家の文化活動を示すもので、明治期の屋敷構えを構成す

る建物の一つで貴重である。

所見記入者：（１．由緒・沿革、２．主屋、３．土蔵、４．本蔵）

愛知工業大学 工学部建築学科 教授 杉野 丞

（５．茶室）

大阪電気通信大学 工学部建築学科 教授 矢ヶ崎善太郎